研究題目

肥薩おれんじ鉄道と連携した修学旅行

～地域鉄道と学校教育とのコラボレーション～

目次

1　研究の主旨、対象者

2　研究・実践の内容

3　具体的な指導とポイント

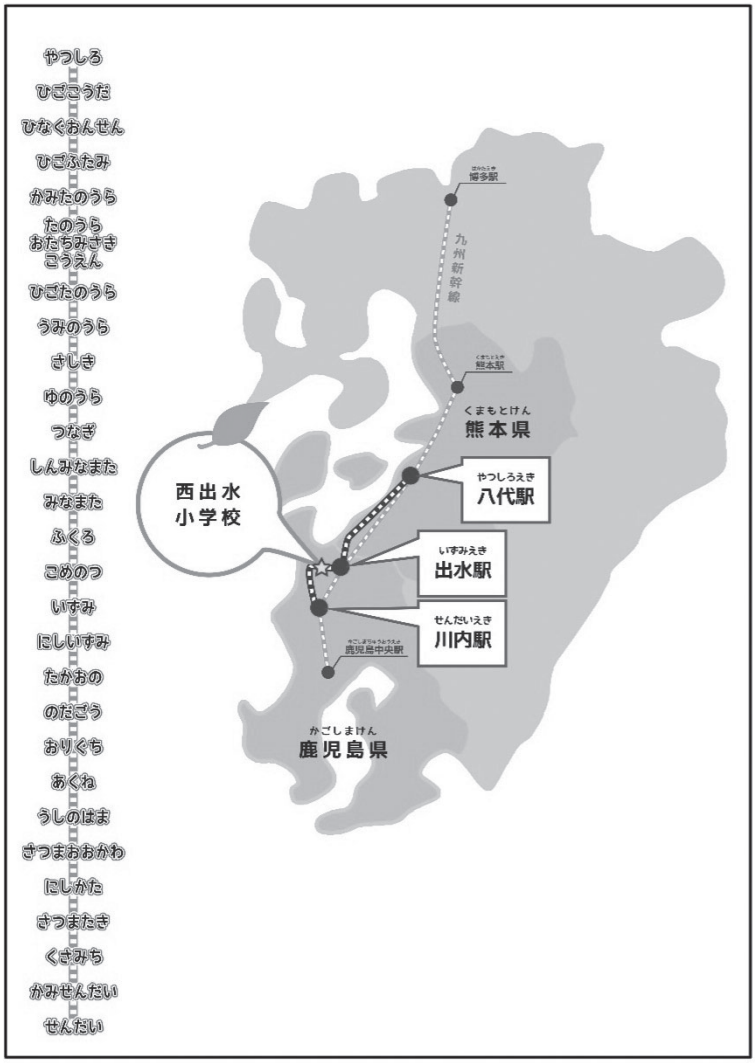
4　研究・実践の成果

5　今後の課題、その他

一年次　車掌に扮した校長（右）
※鹿児島読売テレビ報道局
田中次長（左）と
八代駅にて

鹿児島県出水市立西出水小学校　校長　　桃北　紀和

１　研究の主旨、対象者



本校は、鹿児島県の最北部で熊本県境の出水市に所在し、肥薩おれんじ鉄道（以下おれんじ鉄道）西出水駅は徒歩２分と至近距離にある。

修学旅行はこれまで全行程で貸し切りバスを使い主に熊本方面への実施であった。６年生の教室からおれんじ鉄道の車両や線路が見えるにもかかわらず、子どもたちが乗車する機会はほとんどなかった。また、おれんじ鉄道でも、貸し切り車両は２両までしか対応できないという事情があり、全行程バスでの修学旅行にせざるを得なかった。

修学旅行におれんじ鉄道を利用することで、子どもたちがいつも見ていたおれんじ鉄道を身近に感じ、車窓を含めた郷土教育に生かすことができればと考えていた。

学習指導要領が本格実施され、開かれた教育課程の一つとして、修学旅行でのおれんじ鉄道利用を計画した。新型コロナウィルス対応がなされたおれんじ鉄道利用をすることで地域への恩返しもできると考えた。

2020年４月に赴任した際、６年生85人の児童数で２両運行ができることになり、本研究・実践をスタートさせた。６年生を対象とした３年間の実践及び研究計画である。

２　研究・実践の内容

⑴　１年次（令和２年度）

ア　行程

１泊２日の初日に、西出水から八代までの乗車とした。その後貸し切りバスで

阿蘇方面に向かう行程とした。子どもたちは重いバッグをバスに預け、校庭での出発式の後徒歩で西出水駅に向かい乗車した。

イ　郷土教育の視点

主に歴史として次のものを取り上げた。

【境橋】

鹿児島県と熊本県境に架かる石橋で明治以降に架けられた。江戸時代は川を歩いて渡っていた。伊能忠敬もここを通ったとされる。おれんじ鉄道が橋の横を通っている。

主に地理として次のものを取り上げた。

【水俣市】

水俣病や環境モデル都市としての取組を学んだ水俣市。水俣駅からも窒素の工場へ線路が延びていた。子どもたちが低学年で行った「エコパーク水俣」も車窓から確認することができる。

【不知火海】

上田浦駅前後では、線路が不知火海沿いを走り、目の前に天草半島、遠くに雲仙岳も臨むことができる。

【みかん】

おれんじ鉄道の社名にもなっているみかん。沿線には様々なみかんの木が植えられ、車窓からも見える。

主に鉄道に関して次のものを取り上げた。

【西出水小学校のＳＬ動輪】

西出水小学校の校庭にＳＬの動輪が設置されている。鹿児島本線の特急「はやぶさ」などの優等列車を牽引していたＣ６１型１８号機のものである。子どもたちは毎日見ているが、あまり意識していない。

【出水駅のＣ５６型９２号機】

出水駅の線路沿いにきれいな姿で展示されている。昭和４７年の太陽国体時にお召し列車を引いた機関車。

【水俣駅の食堂車への給水設備】

昔の特急には食堂車が連結されていた。食堂で大量の水を使うため途中で給水が必要であった。その設備の一部が現在も残されている。

ウ　解説シートの作成

修学旅行当日は車窓や放送案内に集中させたいので解説シートを作成し、当日必要があれば携行して見ることができるようにした。（資料１）

エ　添乗員、おれんじ鉄道との打ち合わせ

以上の視点でおれんじ鉄道での１時間半を体験乗車させることについて、添乗員及びおれんじ鉄道社員との打ち合わせを行った。その際に、学年主任の発案で、新型コロナウィルスで落ち込んでいる地域の盛り上げにつながる演出を考えた。

その結果、沿線案内はアテンダントで卒業生のＯさん、鉄道に関する案内は車掌に扮した校長が行うことにした。コンセプトは「卒業生がアテンダント校長が車掌」とした。また、地元新聞社やテレビ局の取材が決定した。

オ　アナウンスシートの作成

テレビ取材クルーは、西出水から八代までの全行程を取材することになり、より正確な案内をするためにアナウンスシートを作成した。事前に同じコースを取材し、確認を行った。

カ　重点ポイントでの徐行や停車

貸し切り列車ならではの演出をおれんじ鉄道がしてくださった。境橋では車両を停車させ、１両目は熊本県、２両目は鹿児島県の位置でアテンダントのＯさんが説明をしてくださった。

また、不知火海ではいつも以上にスピードを落としてくださり、ここもＯさんの説明に聞き入ることができた。

どちらも線路がそばを通っており貸し切りだからこその演出であった。

⑵　２年次（令和３年度）

ア　３両貸し切りへの挑戦

２年次は児童数が100人を超え、３両になるため、再びバスでの修学旅行となる予定であった。しかし、新聞やテレビ報道での反響が大きく好評だったそうで、おれんじ鉄道から３両で利用してほしい旨の申し入れがあった。県の補助金もおれんじ鉄道から県に相談してもらい、初の３両貸し切りへの助成が決定した。

おれんじ鉄道も３両での営業運転は９年ぶりとのこと。いつもはワンマン運転なので、当日に備え事前に車掌の練習等してくださった。

イ　行程

新型コロナウィルス感染症拡大のため、急遽行き先を鹿児島県内に変更した。おれんじ鉄道利用は、二日目の最後の行程で川内から西出水間となった。

これは、朝では３両編成を組むことが難しいとのおれんじ鉄道側の事情があった。

川内駅までのバスの行程をゆとりあるものにし、実施することとした。

ウ　学習上の視点

社会科の視点として川内川を挙げた。

【川内川】

県内一大きい河川川内川。熊本・宮崎をとおり川内で東シナ海に注ぐ。理科の視点として風力計を挙げた。

【風力計】

強風の吹く場所に設置され、風力によっては、列車の運行を止めたり徐行させたりするデータを送信する風力計。今回は、薩摩大川と牛ノ浜の間にあり、国道３号からもよく見える風力計を選んだ。

郷土教育の視点として次のものを挙げた。

【人形岩】

西方駅近くにある天然石の岩。奇岩としてしられ、数々の伝説がある。

【牛ノ浜海岸】

牛ノ浜駅至近に見られる岩石群。牛の背中に見えることから牛ノ浜の名前がついたという。

【阿久根小学校校庭】

出水市の隣の阿久根市にある阿久根小学校は、校舎から校庭へ行く際におれんじ鉄道の線路をまたぐ。このような学校は県内で唯一である。また、当日引率する職員の中に阿久根小勤務経験者がいることもあり、選んだ。

主に鉄道に関して次のものを取り上げた。

【赤瀬川信号場】

阿久根と折口の間にある行き９違いのための信号場。昭和５０年に新幹線が博多まで伸びた際、博多から鹿児島までの特急が増えたことにより作られた。乗客の乗り降りはないためホームはない。

エ　解説シート・アナウンスシート原案の作成

前年に準じて川内から西出水までのおれんじ鉄道解説シートを作成し、事前に配布した。子どもたちは当日携行して必要に応じて確認した。

また、アナウンスシートの原案を作成し、打ち合わせに備えた。

（資料２）

オ　添乗員、おれんじ鉄道との打ち合わせ

前年度の成果と課題をもとに念入りに打ち合わせをした。

まず、沿線案内の分担をより明確にした。日常おれんじ食堂のイベント列車で案内している人形岩と牛ノ浜はアテンダントのＯさん。鉄道関係は指導運転士のＳさん。川内川、風力計、阿久根小学校は各学級代表の児童の分担とした。

この際におれんじ鉄道から「せっかくだからくまモンラッピング車両を３両つなげませんか。」と提案があり、子どもたちも好きなことからお願いした。

カ　卒業生による出前授業

打ち合わせの際に、卒業生の出前授業として、Ｏさんに事前に来校していただき、子どもたちとの対面と学級代表でアナウンスする子どもたちへの指導をお願いした。Ｏさんはまず各学級を回り自己紹介をしたり小学校時代の話をしたりした。

「当日は『ゆきちゃん』と呼んでね。」と子どもたちの距離を縮めていただいた。

また、実際にアナウンスをする３人には、校長室で個別に指導をしていただいた。景色を確認しながら観光バスのように案内すること、抑揚を使い大事な言葉が聞こえやすくすることなど実演を交えながらそれぞれにアドバイスをしていただいた。

Ｏさんも、「私がいつも乗車しているおれんじ食堂は２両ですが、皆さんは今度３両という私も経験したことのないことをされる。」と話し、「一緒に頑張りましょう。」と締めくくられた。

子どもたちはアドバイスを基に、自分の原稿を書き直したり、新たに調べたことを書き加えたりしてアナウンスシートを完成させていった。

キ　重点ポイントでの徐行や停車

作成した解説シートやアナウンスシートを基に、人形岩での停車（１両分ごと前にずらす)、風力計での徐行などを決定し、沿線案内が子どもたちによく分かるように配慮した。

ク　鉄道学校

今回、おれんじ鉄道は３両編成運行にあたり各車両にアテンダントを乗車させてくださった。Ｏさん以外は男性であった。また、運転士は女性でジェンダーフリーを子どもたちに印象づけるものとなった。

また、指導運転士のＳさんや広報担当のＮさんが、赤瀬川信号場の説明や最高速度の問題など鉄道に関する出題をしてくださった。子どもたちは、毎日見ているおれんじ鉄道の車両に興味をもてたようだ。鉄道車両内で学ぶ鉄道学校としての初の試みであった。

ケ　地元新聞社やテレビ局の取材

地元新聞社とテレビ局にも取材を依頼した。

新聞社は出水支局の記者が同乗して私たちと行程をともにし、川内総局の記者が川内駅で取材、写真部の記者が沿線で写真を撮りカラーで掲載された。

あわせておれんじ鉄道利用の修学旅行が増えているとしてその魅力を伝える記事を１面のサブとして掲載してくださった。（資料３）

地元テレビ局はカメラを２台に増やし、一つには音声クルーがついて３人で同乗し、沿線のアナウンスを中心に取材された。また、風力計など沿線にも２台のカメラマンを派遣し、くまモン３両編成を撮影した。Ｏさんの事前指導についても取材してくださり、アナウンスをする子どもたちの成長が見て取れる内容に編集してくださった。約１か月後に夕方ニュース番組の特集として８分、１か月半後にも深夜の特集番組として１２分放送してくださった。

また、くまモン３両編成が鹿児島県内を走行するのは初めてということで、全国紙の新聞１社、地元他局のテレビ１社が取材をしてくださった。全国紙は同乗されテレビ局は川内駅での取材となった。子どもたちもインタビューにはきはきと答え、自分たちの思いを伝えることができた。

なお、マスコミ各社には解説シートとアナウンスシートを配布し、こちらの意図を理解していただいた上で取材をしていただいた。子どもたちのアナウンスは、それぞれの車両から行ったため、アナウンスシートにあわせて各号車を伝え、取材が確実に行われるようにした。

⑶　３年次（令和４年度）の構想

ア　３両貸し切り運転の継続

今年の児童数は９５人で、今年も３両での貸し切り運転継続を予定している。現在のところ、熊本県への行程で３両を連結する関係上、２日目の帰りに八代から西出水までおれんじ鉄道利用である。

今年は児童の中に車いす利用の子どもがいるためバリアフリーが一つのテーマとなる。おれんじ鉄道からも「勉強させてください。」との返事をいただき、児童本人や保護者の意向を踏まえ実施していくことにしている。

イ　学習上の視点

現在のところ、八代から西出水に向かって次のような素材を考えている。

【球磨川】

熊本県内最大の河川であり、最上川、富士川と並ぶ日本三大急流の一つ。球磨川橋梁の麓には風力計が立つ。

【日奈久】

温泉とちくわで有名。

【不知火海】

１年次と同様。

【肥後田浦～海浦間】

おれんじ鉄道唯一の複線区間。国鉄時代に進められ完成した。

【湯浦】

みかんについての説明。

【水俣】

１年次と同様。

【境橋】

１年次と同様。

【米ノ津】

野間の関。江戸時代に藩境におかれた関所の一つ。

【米ノ津港】

川内港ができるまで県内で一番の積み出し港。現在も飼料のサイトなどがあり多くの利用がある。

ウ　水俣病の出前授業

現在の６年生は、新型コロナウィルスの影響で、５年次に水俣病歴史資料館を見学できていない。インターネットなどで調べただけになっている。今回、おれんじ鉄道利用で見学することはできないが、15分ほど水俣駅に停車させることができれば、車内での出前授業が可能と考えた。実施にはいくつかのハードルがあるが、諦めずに挑戦したい。

エ　解説シート・アナウンスシートの作成

１年次のものを基に、子どもたちに事前に学習できる解説シート、子どもたちがアナウンスをする基になるアナウンスシートの作成を行う。それらを基に、添乗員やおれんじ鉄道との打ち合わせを行っていきたい。

アナウンスシートは、２年次同様、子どもたちの加除修正を行わせたい。

オ　添乗員、おれんじ鉄道との打ち合わせ

今年は２回の打ち合わせを計画している。１回は私が計画したものを示し可能かどうかの打ち合わせ。２回目は列車の運行ダイヤが決定した段階での分担等の打ち合わせである。また、新聞社やテレビ局の取材が入る場合の対応等も打ち合わせする予定である。

カ　おれんじ鉄道社員による出前授業

昨年は卒業生のＯさんにアナウンスの事前指導をしていただいた。今年も同様にお願いしたいと考えている。

おれんじ鉄道の社員の中には、Ｏさん同様におれんじ食堂にアテンダントとして乗車している方、ＳさんやＮさんのような運転士、保線や電気整備など裏方として運行を支えている方、おれんじ食堂に食事を提供している方などたくさんの方々がいらっしゃる。アナウンスの子どもたちにはＯさんなどアテンダントの方に指導していただくとして、車両や運転に興味のある子どもたちには、それぞれ専門の方々の指導を受けられるに越したことはない。中には、本校の保護者もいらっしゃる。子どもたちの学習意欲と興味を考えながら可能な範囲で出前授業を計画していきたい。

キ　重点ポイントでの徐行や停車

今回も次の地点で徐行や停車をお願いすることにしている。

【不知火海】、【境橋】

ク　鉄道学校

おれんじ鉄道では、昨年度の本校での実施を手始めに、修学旅行や遠足での貸し切り運行時に鉄道学校を開催している。専用のヘッドマークも新調された。今年もおれんじ鉄道と打ち合わせながら、鉄道に関することについて鉄道学校を実施したい。

ケ　バリアフリーへの挑戦

前述のように今年は児童の中に車いす利用者がいる。４年生の４月に「姉と同じ小学校に通いたい。」と養護学校から転入してきた子どもである。肢体不自由の特別支援学級として増設が認められたため、日常の排泄は支援学級内で行い、担任か看護師免許をもった特別支援教育支援員が見守りを行っている。

これまでも遠足では、事前に訪問先や見学箇所のトイレ等について担任が下見をし、必要な支援と施設への要請を行ってきた。

今回も修学旅行全般にわたってバリアフリーの視点で見直すことにした。

見学先もエレベーターのある熊本城とグリーンランドを中心にし、曜日も修学旅行生の比較的少ない火曜日と水曜日にした。ホテルは、部屋に障害者用バスがあるところを選んでいただいた。

バス会社からはリフト付きバスの提案もあったが、これまでの遠足の状況から、通常のバスをお願いした。

おれんじ鉄道も、車いす対応の駅をホームページで公開し、車両はすべて車いす対応のトイレになっている。ただし、西出水駅が跨線橋を渡ってホームに行く構造のため、車いすのままの乗車ができない。跨線橋の階段部分には手すりがあるが、登り切って線路を横断する部分には手すりが付いていない。今後、本人や保護者の意向を確認し、最終的な決定を行っていきたい。

なお、場合によっては保護者が出水駅に送迎し１番ホームで車いす乗降することについては了承をいただいており、おれんじ鉄道のダイヤ作成にあたっても、貸し切り列車３両が１番ホームに入るよう設定することで確認済みである。

また、保護者に対しては、マスコミの取材があった場合に、取材対象となる可能性があること、バリアフリーの観点からの中心的な取材の可能性もあることを伝え了承を得ている。

私の思いとしては、日常さりげない形で支援している級友の良さをおれんじ鉄道での修学旅行でより深めさせたいと考えている。

コ　マスコミへの取材依頼

今回は、くまモン３両編成を八代から西出水まで走らせる予定であることから、これまでの地元メディアに限らず、熊本県のマスコミにも取材を依頼したいと考えている。

鹿児島県内だけでなく、熊本県内の学校のおれんじ鉄道利用が増えてくれればという願いがある。

サ　演出依頼

昨年くまモン３両編成を鹿児島で初めて運行した際の反響は大きかった。今回も３両編成での修学旅行実施は本校だけであることから、熊本県の方々にも興味をもっていただくべく、次のような演出を考えている。

それは、八代駅でくまモンの見送りと出水駅または西出水駅でのグリブーの出迎えである。どちらも県を代表するキャラクターで肥薩おれんじ鉄道という第三セクターの会社ということを考えると最適な演出であると考える。修学旅行においても肥薩の連携で互いの郷土の学び合い（「学び愛」）につながっていけばと考えている。

実現にはハードルが高いが、諦めずに頑張っていきたい。

３　具体的な指導とポイント

今回の研究・実践にあたり校長として職員や児童を次のように指導し、添乗員やお

れんじ鉄道社員に協力を求めた。

⑴　１年次

校長としてリーダーシップを発揮するべく行動した。始まりが学年主任の発案だったこともあり、おれんじ鉄道内の内容については私に一任してくれ、全面的に協力してくれた。

コロナ禍ではあったが、３クラスが２両に分かれて乗車することもあり、各車両間の行き来は自由とした。おれんじ鉄道の旅を楽しむことに主眼を置いた。

これにより、運転席の横で前を見たり運転士のアクセル操作をじっと見ていたりする子、向かい合わせの席でマスク越しに談笑する子、窓際でうとうとする子と様々であった。

事前に解説シートを配布し、調べさせ、知識的なものは教室での学習で行うことを優先させた。また、修学旅行終了後の振り返り学習を行わせた。そのため、乗車中には、アテンダントや運転士にラッピング列車や運転速度について質問する児童が複数いた。

また、おれんじ鉄道側の好意で、各学級代表が作成したヘッドマークのデザインを車両の先頭ガラスに貼り付けてくださった。第２候補の図案は西出水駅に掲示してくださり今でも見ることができる。

⑵　２年次

２年次は、校長がリーダーシップを発揮しつつ、当日は裏方に回ることに努めた。子どもたちの活躍の場をつくり、アテンダントや運転士などの、子どもたちが日頃接する機会のない方々の活躍の場を設定することに努めた。

アナウンスをする子どもたちには、マスコミが映像を流すことを踏まえて、事前に原案を作成し、アテンダントの事前指導を受け、子ども自身に加除修正をさせて本番に臨ませた。

また、コロナの状況を踏まえると共に、１クラス１両ごとの貸し切りとなったことから、原則として車両間の移動は禁止し、各学級代表のアナウンスを集中して聞ける環境を整えた。また、アナウンスの直前にはテスト放送を行い、マスコミ取材の緊張をほぐすようにした。

なお、乗車前日のおれんじ鉄道からの情報により、川内駅に鉄道ファンが集まることが予想されたため、急遽、宿泊しているホテルで添乗員やテレビクルーとの打ち合わせを行った。子どもたちを複数の方向からホームに向かわせることや、各担任の引率・誘導について職員を踏まえて確認を行った。

⑶　３年次

３年次は、校長としてリーダーシップを発揮しつつ、より裏方に徹したいと考えている。どちらかというとプロデューサー的な存在であればいいと考えている。

今年の学級担任は、３０代４０代と比較的若く発想も豊かである。また１年次と２年次にそれぞれ同乗した職員が一人ずつおり、他の職員と子どもたちもテレビ

放送を見て大体の内容を把握している。校長としての企画は考えながらも、教職員や子どもたちからの企画立案も取り上げられるものは取り上げていきたい。

また、今年のコンセプトであるバリアフリーについては、施設設備面で関係機関との連携を把握すること。該当の子どもたちに情報を伝え、皆で考えながら行動する環境を作っていきたい。子どもたちがこれまで築き上げてきてくれた「特別ではなく当たり前の存在としてつきあう、支援する」修学旅行を実現させるべく努力したい。

最後に、これまで心がけてきたおれんじ鉄道利用修学旅行の汎用性である。他校へも広めるために演出は行うが、解説シートやアナウンスシートなどは広く公開し、他校でも利用できるようにしていきたい。そういう意味でのマスコミ取材を今年も依頼する予定である。そのために、アナウンスなど映像で流される部分については、事前に練習させ、より正確に楽しく余裕をもたせて伝えられるようにしたい。

４　研究・実践の成果

⑴　おれんじ鉄道利用者増

資料３の新聞記事によれば始まりの令和元年度１件、令和２年度９件４５０人（含西出水小１件９１人）、令和３年度１７件約１０００人（含西出水小１件１１０人）。本年度は８月１６日現在１１件４８０人（含西出水小１０２人）で今後も増える見込みである。昨年は熊本県の遠足利用が数件あったが、今年度同日時点では予約されていない。

⑵　他校への広がり

新聞はもとよりテレビの反響は大きかった。市内各学校には事前に放送日と放送時間を伝えたため、特に利用する予定の学校は、リアルタイムや録画で見たりテレビ局のホームページから１週間限定で見たりすることができた。

そのため貸し切り車両の中で、どのように過ごせば良いか具体的に知ることができ、添乗員の勧めもあって広まる形となった。

おれんじ鉄道社内でも、西出水小の経験を生かし、車内アナウンスや鉄道クイズなどを中心に、各学校の実態に応じてアレンジしながら対応してくださった。

⑶　校長会や市教委の支援

校長会では、解説シートや打ち合わせ時の注意点などの質問や実際に実施しての感想を出し合った。おれんじ鉄道を利用した修学旅行について新たな発見をした校長が多かった。

また、市教委は、２年次の修学旅行が放送された後の教頭会・教務主任会合同研修会において、実際のテレビ映像を流してくださり、アイディア次第でコロナ禍でも有意義な修学旅行ができることを広めてくださった。

⑷　保護者や地域が元気に

保護者や地域の方々に掲載日や放送日を知らせることで、西出水小の修学旅行に

ついて深く知っていただくことができた。「これまでは子どもから話を聞くだけだったが、テレビで映像を見ることで具体的にどのようなものかを知ることができた。」「何より子どもたちの表情が楽しそうで特別な修学旅行になったことが伝わってきた。」などの声が多く寄せられた。

地域の方々も、「いい修学旅行でしたね。」「校長先生も楽しそうにしている修学旅行ってすばらしい。」などの言葉をいただき、コロナ禍でなかなか会えない地域の方々にも、子どもたちの様子を届けることができた。

⑸　沿線の方々の反応

２年次は、おれんじ鉄道が時刻を公表したこともあり、沿線の方々が手を振ってくださった。家々から手を振ってくださったり、鐵道ファンが撮影かたがた手を振ってくださったり、通過駅では、地元の方々が列車待ちの高校生に伝えて一緒に手を振ってくださったりした。西出水駅にも１０人ほどの高齢の方々がカメラを片手に手を振ってくださった。子どもたちも思い思いに手を振り替えしていた。

なかには、「次にくまモン３両が走るのはいつですか。」と添乗員に尋ねた方もいらっしゃったという。

５　今後の課題、その他

⑴　子どもたちの利用増

西出水小の目の前を走っているおれんじ鉄道について、修学旅行で利用するスタイルが定着してきた。「特別な修学旅行になった。」との先輩の声は引き継がれている。ただし、日常でのおれんじ鉄道利用には結びついていない。

教職員の中には、遠足やPTAの研修で利用できないかと模索する者も出てきた。「おれんじ鉄道と言えば西出水小」と言われるようになったが、今後教職員や子どもたちが自ら学習に利用しようという環境を整えていきたい。

⑵　長期にわたって続ける手法の模索

おれんじ鉄道利用の修学旅行を続けていくためには、無理をせず子どもたちが主役になる手法を考えていく必要がある。

他校の例も参考に、今後とも子どもたちの実態に合わせた手法をとっていきたい。

⑶　熊本県の利用者増

鹿児島県側の利用は、出水地区以外の鹿児島市などにも増えてきている。熊本県の利用は、まだ緒に就いたばかりである。３年次に計画しているような、熊本県の報道機関にも報道を依頼し、映像や写真で興味をもっていただくことが必要になると考えている。

修学旅行おれんじ鉄道解説シート

資料１

6年　　組　　名前［　　］

１　西出水小学校の動輪

C61型蒸気機関車18号機の第1動輪です。直径175cmあり、この車輪が3つついていたのでC型と呼ばれています。

熊本から鹿児島中央までの特急はやぶさなど高速で走る旅客列車を引っ張っていました。

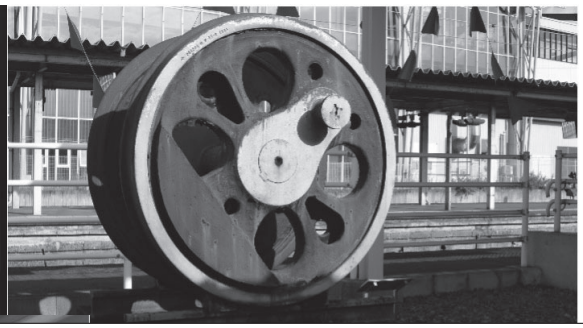
西出水小へは1978年8月23日にPTAの方々で購入し玄関前に設置。その後この場所へ移されました。

２　西出水駅

1923年10月15日武本駅として開業しました。その後、1928年7月11日に西出水駅となりました。

現在の駅の建物は1966年8月に建てられたものです。近くに高校が多いため、平日の朝夕は駅員さんがいらっしゃいます。

３　出水駅



出水駅には1929年から1971年まで機関車が集まる機関区がありました。現在、そのあとが車両をとめる場所になっています。

1番ホームの左側にはD51型蒸気機関車の動輪があります。直径は140cmで貨物用の機関車デゴイチとして親しまれています。（車輪が4つはD型です）

駅前にはC56型蒸気機関車92号機が展示されています。1972年の太陽国体で天皇陛下が乗られた車両を引っ張りました。

修学旅行肥薩おれんじ鉄道アナウンスシート（案）

資料２

川　　内　　１５：３０　頃

※　発車前に、注意事項（他の車両への異動はしない。放送は静かに聞く。）

※　ガイド役３人の児童紹介。アテンダントさん、運転士さん等の紹介

◎　川内川の説明・・川内を出発すると、すぐ川を渡ります。川内川
（１号車から）　です。川内川は、鹿児島県で一番長い川です。
九州でも２番目に大きい川です。熊本からスタートして宮崎を通り、最後はここ川内で海に注ぎます。３つの県を通る川です。
　川内川はカヌーや花火大会で有名です。列車は川内川橋梁を渡るので、窓から川内川を眺めてみましょう。以上川内川の説明でした。

薩摩高城　　◎　発車後　人形岩の説明（アテンダントさん）

西　　方　　◎　通過後　風力計の説明。（２号車から）
　皆さん、もうすぐすると左に海が見えます。そうしたら逆の右側に注意してください。列車が少しゆっくりとなったところで、右側の窓から少し上の方を見ていてください。理科の学習で習った風力計が、見えてきます。これはすぐ近くの鉄橋の風速を図っています。風速２５ｍ以上で列車を徐行させたり運転を見合わせたりします。風力計が鉄道の安全運行に役立っているんですね。以上風力計の説明でした。

薩摩大川　　通過後　◎　牛ノ浜の説明（アテンダントさん）

牛ノ浜　　通過後

◎　阿久根小学校の説明。（３号車から）
　皆さん、列車はまもなく阿久根に到着します。阿久根駅の手前に阿久根小学校があります。阿久根小学校は、線路の上を通って校舎から運動場へ行く学校です。体育の授業のたびにおれんじ鉄道の線路の上を通って校庭へ行きます。左側に校舎、右側に校庭があります。このような学校は鹿児島ではここだけです。詳しいことは、AS先生やAD先生に聞いてみましょう。以上で阿久根小学校の説明を終わります。

資料３

第２８６１６号　２０２１年(令和３年)１０月１３日　水曜日　南

おれんじ鉄道

修学旅行貸し切り好調

19年度１件→本年度17件

車窓風景 郷土教育に活用

肥薩おれんじ鉄道（熊本県八代市）で、修学旅行の貸し切り利用が好調だ。２０１９年度の1件に始まり、21年度は鹿児島県内の沿線自治体を中心に17件を見込む。低迷する輸送人員の好転を目指すおれんじ鉄道と、車窓風景を郷土教育の充実に役立てたい学校側の思惑が一致した形だ。

「川内川は熊本、宮崎を通る鹿児島で一番長い川です」。7日、西出水小学校（出水市）の修学旅行生１０４人を乗せた貸し切り列車。川内駅から西出水駅まで児童3人が沿線ガイドに挑戦し、尾崎蘭さんは社会科で学んだことを振り返る解説を盛り込んだ。

2年連続となる同校の利用は薩摩半島を巡る1泊2日の締めくくり。おれんじ鉄道にとっては、県内の新型コロナウイルス「まん延防止等重点措置」が解除になって初の修学旅行利用だった。

同鉄道は20年度、コロナ禍と豪雨災害が直撃し、輸送人員が前年度比25％減の80万４千人に落ち込んだ。修学旅行での貸し切りは巻き返し策の一つ。19年度の初利用が好評だったのを受けて営業に本腰を入れ始めた。

貸し切り料1両約６万円の半額近くを県の補助金でまかなえるのも追い風だ。20年度の実績は9件約４５０人で、21年度は5校合同の利用を含む17件約千人に急増の見込み。同鉄道の薬丸剛営業総務課長(51)は「コロナ禍で修学旅行の県内志向が強まったおかげ」と語る。

運転士姿でガイドを終え、拍手を浴びる西出水小学校の児童（中央）＝7日、肥薩おれんじ鉄道車内

学校にとっては車窓の景色を郷土教育の素材に充てられる魅力が大きい。10月下旬に同鉄道を一部使い、6年生73人が熊本県に向かう阿久根小学校（阿久根市）の井手上司教諭(45)は「移動時間に古里を改めて学ぶ。地元の公共交通に興味を持つきっかけにもなれば」と期待する。

同鉄道は引き続き、旅行代理店と協力して貸し切り利用をPRする方針。薬丸課長は「コロナ後の利用につなげ、〝おらが鉄道〟意識を多くの子どもに持ってもらいたい」と話している。

（種子島時大、加藤武司）

南日本新聞　2021年10月13日掲載